長編小説

小さな赤い花

田宮虎彦

光文社

読者へのお願い

あなたはこの本を読まれてどんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それといっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思いますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教え願います。ご職業、年齢などもお書きそえください ませんか。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

昭和三十六年七月十五日　印刷
昭和三十六年七月二十日　初版発行

定価三八〇円

長編小説　小さな赤い花

著者　田宮虎彦
東京都武蔵野市吉祥寺一七九九

発行者　神吉晴夫

印刷者　盛英信

印刷所　慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区関口町一四〇

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚（941）一一〇〇—九
振替東京一一五三四七

（関川製本）

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取り換えいたします。

© Torahiko Tamiya 1961

目次

第一章　柿の木と蛇……五
第二章　影絵……四一
第三章　遠い音……七五
第四章　小さな赤い花……一一三
第五章　ファンタジア……一八九
第六章　沼……二一七
あとがき……二七三

装丁·加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

長編小説

小さな赤い花

森山　啓氏に——

第一章　柿の木と蛇

お母さんは病気が重くなると、少年を連れて、遠い南の国にあるお祖父さんの家にかえっていった。少年は、何故お母さんがお祖父さんの家にかえっていくのかわからなかった。黒い大きな汽船の油くさく暑くるしい船室には知らない人たちがいっぱいに乗っていた。その人たちの間にすぐねずみ色の毛布にくるまって寝てしまったお母さんを残して、少年は、一人、夜の甲板に出ていった。

船は港を出ようとしていた。生暖かい潮風が、墨を流したような外海から少年の頬をなでて吹きすぎていった。ふりかえると、たった今まで少年がすごして来た繁華な港の町が、うっすらと闇にういて見える山の中腹まで、キラキラと輝やく灯にいろどられて、美しく見えた。

少年は、両手をラッパのように口にあてて、

「きれいだなア」

と幾度も幾度も叫んだ。叫びながら、こんなに美しい町の灯を、お母さんに見せないわけには

いかないと思って、手すりのついた階段をころげ落ちるようにつたわりおりて、お母さんのところへ駈けていった。

少年は、寝ているお母さんの手をとって、

「見にいこうよ、とってもきれいだよ」

といった。だが、お母さんは淋しそうにほほえんで見せただけであった。そして、やっと、

「あぶないから、もう、ここで、ねんねしなさいね」

といった。少年は、しぶしぶうなずいて、お母さんの手に抱かれて寝た。久しぶりにお母さんに抱かれて寝るのであった。少年は、それがうれしくて、そっとお母さんの乳房を手でさぐった。痩せた、しなびた乳房であった。お母さんは、小さな囁き声で、

「こんなに大きくなって、お母さんのお乳などさわっては皆さんに笑われますよ」

と叱った。しかし、叱ったことをすぐ後悔したように、

「お母さんと二人きりで、うれしいの」

といった。隣りに寝ていた知らないおばさんが、少年をのぞきこんで、

「いいねえ、ぼん」

といった。少年は、はずかしくなって、顔をお母さんの胸にすりつけていった。うれしいといたかったのだが、隣りのおばさんに聞かれそうで、口には出せずに、お母さんの胸にぐんぐん

顔をおしつけていった。お母さんの両手が力いっぱい少年を抱きしめた。
「お祖父さんのお家へかえったら、お祖父さんやお祖母さんのいうことをよく聞くんだよ」
お母さんの声が少年の耳もとでした。
「お祖父さん、お父さんより怖い？」
少年は、お母さんの胸から顔をはなして、お母さんを見た。薄暗い電燈が遠くで黄いろくともっている。
「お父さんとは違うわ」
お母さんはしばらく考えこんでいたが、やがて静かにそういった。それから、まだうたぐり深そうにお母さんを見つめている少年に、
「心配しないでねんねしなさいね」
といってから、ほっと溜息をついて、
「お父さんは、どうして、お前が嫌いなのかねえ」
といった。
少年は、お母さんがお父さんのことをいうと、ビクッと身体をふるわせた。少年のうしろにお父さんが立っていて、じろっと少年をにらんでいるような気がしたからであった。港の町の背山の山肌がつきる崖裾にあったお父さんの家で、少年がお母さんに抱かれて寝ているところを、も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しお父さんにみつけられると、お父さんは少年を鷲づかみにしてお母さんの手からもぎはなし、小さな少年の顔を思うさま殴りつけて、自分もハアハアと息をきらせながら、冷たく、

「あっちへ行け」

と怒鳴りつけたのであった。少年は、そんなお父さんを思い出したのであったが、船に乗ったのはお母さんと二人だけだったと、すぐ思いかえして、老人のような溜息をふっとついた。

少年は、お母さんから、

「これからは、お母さんと二人だけなんだよ」

とおしえられていた。それが、お母さんの病気が重くなったために、お父さんから実家に追いかえされたのだとは知らなかったから、少年は、お母さんのその言葉を聞くと、手をたたいて喜んだ。鬼のようなお父さんの眼から、一分でも一秒でもはなれていることが出来るとしたら、どんなにたのしいことだろう。お母さんのそばから少しもはなれないで、何時(いつ)でもお母さんにあまえていることが出来るのだ。少年はそんなことを考えこんでいるうち、深い眠りにおちこんでいった。

お母さんが少年を連れてかえったお祖父さんの家は、大きな川のほとりにあった。野菜畑や桃畑が築地塀(ついじべい)の中にかこまれている広いお祖父さんの家で、少年はお母さんと二人きりで裏庭の離

れに住むことになった。その離れは、お祖父さんやお祖母さんのいる母屋から、桃畑を隔てて、その川の川土手のすぐ下にあった。まわりの野面に夜の闇が落ち、母屋で働いている人たちの話し声も聞こえなくなると、川土手のむこうの、川の流れの水音が、サワサワと少年の耳を洗うように聞こえてきた。

北の町の繁華な港町のお父さんの家では、どんなに夜がおそく更けても、町のざわめきが絶え間もなく聞こえていた。レールをきしませて走りすぎる電車のひびきや、港を出ていく外国航路の汽船のものうく眠たげな汽笛や、港の中を走りまわる小蒸気のつんざくような鋭い汽笛や、町かどの夜泣きうどんの車のチャルメラや、遠くで罵りあい喚きあっているわけのわからない人声や——そういったいろいろの物音が、ふっと眼覚めた時の少年の耳に聞こえて来ていたのであったが、お祖父さんの家の離れでは、そんな物音はぴったりと消えてしまって、そのかわり、サワサワと冷たく堅い布をもむような水音が、何時までも何時までも同じ調子をくりかえして聞こえていた。

少年がお母さんといっしょに、二人だけで、その離れで寝るようになったのは夏のまだはじめの頃のことで、少年は、寝ると、川の流れに自分が小さな笹の葉になって流れている夢を、よくみた。お母さんを残して、少年の身体だけがコキコキと流れていくのであった。おどろいて眼がさめると、暗い黄いろい電燈の灯りが、青い蚊帳をとおして、お母さんの頬に落ちていた。蚊帳

のいろの青さのせいか、お母さんの白い頬は、青い絵具をぬったように青く見えた。少年がいつ眼ざめても、お母さんはいつも眼がさめているようであった。そして、いつもぼんやり暗い電燈を見つめていた。

少年は、毎夜、お母さんの乳房に頬をおしあてて寝ているのであったが、そんなお母さんに気づくと、そっと身体をお母さんからはなして、

「お母さん」

とよんだ。

暗い電燈を見つめていたお母さんは、少年を見た。やさしい顔がにっこりほほえんで、

「お前、また、いつもの夢をみたんだね」

といった。少年は、——笹の葉になって川の流れにうかんでいて、身体を洗うように川の水が流れていて、自分だけがお母さんからはなれていく夢のことを、お母さんに幾度も話して聞かせていた。お母さんは少年のみるその夢のことを、すでに知っていた。そして、それが、少年の聞きなれない川の流れの水音のせいだということも知っていたのであった。お母さんの耳にも、サワサワと流れる川の流れのその水音は聞こえていた。それは、少年にとっては、お祖父さんやお祖母さんの家にお母さんに連れられてかえって来るまで聞いたことのなかった音であったけれども、お母さんには聞きなれたなつかしい音であった。少年がお母さんに抱かれて寝ているよう

に、お母さんがお祖母さんに抱かれて寝ていた頃から、港の町の少年のお父さんのところへ来た数年前まで、お母さんは、その川の流れのサワサワと聞こえる水音を、毎夜聞いていたのであった。青い蚊帳の外にまたたいている暗い黄いろい電燈の灯りを、ぼんやり見つめていたお母さんは、数年前に消え去ってしまった遠い思い出を心に追っていたのだ。

だが、お母さんは、不安そうに自分を見つめている少年にはそんなことは言わず、痩せてしまった自分の腕を少年の手枕にして、そっと少年をゆすぶって、

「お母さんはここにいるから大丈夫」

といった。柱にかかった古い時計が、ボン、ボン、ボン、ボン……と十二時をうった。そして、川の水音ほど静かにコチコチと時をきざみつづけた。そのものうく淋しい柱時計の音が、少年をすぐまた深い眠りにさそいこんでいった。少年は、お母さんの燃えているようなあたたかい胸と――お母さんがいるから大丈夫、といってくれたお母さんの声とに自分の心をあずけきった。それで、お母さんが、

「川の音なんか、すぐなれて、そのうち、きっと聞こえなくなるからね」

といってくれている声も、おしまいの方は、ぼんやり耳の中で消えていった。

お母さんがいったように、静かな川の流れの音に、少年は、半月とたたぬうちになれていった。サワサワと聞こえるその冷たく堅い水音は、それが聞こえなければ、かえって眠れない子守

唄のように、少年には思えはじめた。少年は、もう一度赤ん坊になってしまったようにお母さんにあまえた。お母さんのこしらえてくれる二人だけのままごとのような夕方の御飯がすむと、お母さんの吊ってくれた青い蚊帳の中へはいって、お母さんを呼んで、お母さんに絵本を読んでもらったり、むかしむかしのおとぎばなしをしてもらったりした。絵本の数は少なくて、少年は、表紙の絵を見るだけで、中に書かれている言葉をすっかりそらでいうことが出来た。また、お母さんの話してくれる遠い遠いどこかの国のおとぎばなしも、お母さんが一番はじめに言いだす言葉を聞いただけで、お母さんの声につづけて、少年も、自分でそのおとぎばなしのあとを追うことが出来るほどになってしまっていた。だが、少年は、毎夜、はじめて読んでもらう絵本のように、また、はじめて話してもらうおとぎばなしのように、お母さんがそばに来てくれると、

「お母さん、絵本よんで——」

とか、

「お母さん、むかしむかしのおはなし聞かせて——」

とかといって、ねだった。

お母さんが読んでくれたり聞かせてくれたりする絵本やおはなしには、極楽があったり地獄があったりした。また森の中に小人の国があったり、賑やかな町があったりして、そこには貧しい機織(はたお)り娘ややさしい王様や王子がいた。

少年は、そうした毎夜がたのしくてならなかった、少年は、お母さんと二人だけでなら何時までもお祖父さんの家の離れにいたかった。だが、お母さんは、時々、ふっと言葉をとぎらせて、

「さびしいねえ」

と溜息をつくように言った。蚊帳のまわりを、蚊がないてとんでいた。お母さんは、その蚊の翅(はね)の音に耳をすましてでもいるように、そんな時、淋しそうにくびをかしげて、じっとどこかを見つめていた。少年は、そうしたお母さんの淋しさはわからなくて、何故、お母さんは——さびしいねえ、などというのだろうかと不思議に思った。港の町のお父さんは、少年にはこわいお父さんであった。少年は、お父さんの笑った顔を見たことがなかった。絵本にかいてある地獄の赤鬼や青鬼のように、いつもギラギラ光るような眼で少年をにらみつけていた。そんなお父さんは、お母さんにもこわいお父さんであった。そのことも少年は知っていた。お父さんに苛(いじ)められているお母さんを、少年は、港の町の家で幾度見たかしれなかった。少年がお母さんにあまえているところなど、もし、お父さんに見つけられると、お父さんの顔はみるみる赤鬼のようになって、少年もお母さんも、脚がすくんでしまった。だから、そんなお父さんがいなくて、お母さんと二人だけで、毎日、お母さんにあまえていることの出来ることは、少年にとっては、たのしくてならないことであったのだ。

お母さんがだまってしまうと、川の水の音が急に近くなったように、聞こえて来た。そして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c